手袋を買いに

新美南吉

登場人物

子供の狐（子狐）
母さん狐（母狐）

帽子屋

人間の母親（母親）
人間の坊や（坊や）

一場

◆冬。子狐が初めての雪にはしゃぎ、手が冷たいと母狐に訴える。
◆ナレーター、子狐、母狐

寒い冬が　北方から、狐の親子の棲んでいる森へもやって来ました。
或朝　洞穴から子供の狐が　出ようとしましたが、

子狐　「あっ」
と叫んで眼を抑えながら母さん狐のところへころげて来ました。

子狐　「母ちゃん、眼に何か刺さった、ぬいて頂戴早く早く」
と言いました。

母さん狐が　びっくりして、あわてふためきながら、眼を抑えている子供の手を恐る恐るとりのけて見ましたが、何も刺さってはいませんでした。母さん狐は　洞穴の入口から外へ　出て　始めてわけが解りました。昨夜のうちに、真白な雪がどっさり降ったのです。その雪の上からお陽さまがキラキラと照していたので、雪は　眩しいほど反射していたのです。雪を知らなかった子供の狐は、あまり強い反射をうけたので、眼に何か刺さったと思ったのでした。

子供の狐は　遊びに行きました。真綿のように柔かい雪の上を駈け廻ると、雪の粉が、しぶきのように飛び散って小さい虹がすっと映るのでした。

すると突然、うしろで、
「どたどた、ざーっ」と物凄い音がして、パン粉のような粉雪が、ふわーっと子狐におっかぶさって来ました。子狐は　びっくりして、雪の中にころがるようにして十米も向こうへ逃げました。

何だろうと思ってふり返って見ましたが　何もいませんでした。
それは樅の枝から雪が　なだれ落ちたのでした。まだ枝と枝の間から
白い絹糸のように雪が　こぼれていました。
　間もなく洞穴へ帰って来た子狐は、
子狐「お母ちゃん、お手々が　冷たい、お手々が　ちんちんする」
と言って、濡れて牡丹色になった両手を　母さん狐の前に
さしだしました。母さん狐は、その手に、はーーっと息をふっかけて、
ぬくとい母さんの手でやんわり包んでやりながら、
母狐　「もうすぐ　暖くなるよ、雪をさわると、すぐ　暖く
　　なるもんだよ」
といいましたが、かあいい坊やの手に霜焼ができてはかわいそうだから、夜になったら、町まで行って、坊やのお手々にあうような毛糸の手袋を　買ってやろうと思いました。

二場

◆夜。母狐が子狐を町に送り出す。
◆ナレーター、子狐、母狐

暗い暗い夜が　風呂敷のような影をひろげて　野原や森を包みにやって来ましたが、雪はあまり白いので、包んでも包んでも白く浮びあがっていました。

親子の銀狐は　洞穴から出ました。子供の方は　お母さんのお腹の下へはいりこんで、そこからまんまるな眼をぱちぱちさせながら、あっちやこっちを見ながら歩いて行きました。

やがて、行手にぽっつりあかりが一つ見え始めました。それを子供の狐が見つけて、

子狐　「母ちゃん、お星さまは、あんな低いところにも落ちてるのねえ」

とききました。

母狐　「あれはお星さまじゃないのよ」

と言って、その時母さん狐の足は　すくんでしまいました。

母狐　「あれは町の灯なんだよ」

その町の灯を見た時、母さん狐は、ある時町へお友達と出かけて行って、とんだめにあったことを　思出しました。およしなさいっていうのもきかないで、お友達の狐が、或る家の家鴨を盗もうとしたので、お百姓に見つかって、さんざ追いまくられて、命からがら逃げたことでした。

子狐　「母ちゃん何してんの、早く行こうよ」

と子供の狐が　お腹の下から言うのでしたが、母さん狐は

どうしても足がすすまないのでした。そこで、しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。

母狐　「坊やお手々を　片方お出し」

とお母さん狐が　いいました。その手を、母さん狐は　しばらく握っている間に、可愛いい人間の子供の手にしてしまいました。坊やの狐は　その手をひろげたり握ったり、抓って見たり、嗅いで見たりしました。

子狐　「何だか変だな母ちゃん、これなあに？」

と言って、雪あかりに、またその、人間の手に変えられてしまった自分の手をしげしげと見つめました。

母狐　「それは人間の手よ。いいかい坊や、町へ行ったらね、たくさん人間の家が　あるからね、まず表に円いシャッポの看板のかかっている家を探すんだよ。それが　見つかったらね、トントンと戸を叩いて、今晩はって言うんだよ。そうするとね、中から人間が、すこうし戸をあけるからね、その戸の隙間から、こっちの手、ほらこの人間の手をさし入れてね、この手にちょうどいい手袋頂戴って言うんだよ、わかったね、決して、こっちのお手々を出しちゃ駄目よ」

と母さん狐は言いきかせました。

子狐　「どうして？」

と坊やの狐はききかえしました。

母狐　「人間はね、相手が　狐だと解ると、手袋を売ってくれないんだよ、それどころか、掴まえて檻の中へ

入れちゃうんだよ、人間ってほんとに恐いものなんだよ」

子狐　「ふーん」

母狐　「決して、こっちの手を出しちゃいけないよ、こっちの方、ほら人間の手の方をさしだすんだよ」

と言って、母さんの狐は、持って来た二つの白銅貨を、人間の手の方へ握らせてやりました。

三場

◆子狐が帽子屋で手袋を買う。
◆ナレーター、子狐、帽子屋

子供の狐は、町の灯を目あてに、雪あかりの野原を よちよちやって行きました。始めのうちは 一つきりだった灯が二つになり三つになり、はては 十にもふえました。狐の子供は それを見て、灯には、星と同じように、赤いのや黄いのや青いのがあるんだなと思いました。やがて町にはいりましたが通りの家々はもうみんな戸を閉めてしまって、高い窓から暖かそうな光が、道の雪の上に落ちているばかりでした。

けれど表の看板の上には大てい小さな電燈がともっていましたので、狐の子は、それを見ながら、帽子屋を探して行きました。自転車の看板や、眼鏡の看板やその他いろんな看板が、あるものは、新しいペンキで画かれ、或るものは、古い壁のようにはげていましたが、町に始めて出て来た子狐には それらのものがいったい何であるか 分らないのでした。

とうとう帽子屋が みつかりました。お母さんが道々よく教えてくれた、黒い大きなシルクハットの帽子の看板が、青い電燈に照されてかかっていました。

子狐は 教えられた通り、トントンと戸を叩きました。

子狐　「今晩は」

すると、中では 何かことこと音がしていましたが やがて、戸が一寸ほどゴロリとあいて、光の帯が 道の白い雪の上に長く伸びました。

子狐は　その光がまばゆかったので、めんくらって、まちがった方の手を、――お母さまが出しちゃいけないと言ってよく聞かせた方の手を　すきまからさしこんでしまいました。

子狐　「このお手々にちょうどいい手袋下さい」

すると帽子屋さんは、おやおやと思いました。狐の手です。狐の手が　手袋をくれと言うのです。これは　きっと木の葉で買いに来たんだなと思いました。そこで、

帽子屋　「先にお金を下さい」

と言いました。子狐は　すなおに、握って来た白銅貨を二つ帽子屋さんに渡しました。帽子屋さんは　それを人差指のさきにのっけて、カチ合せて見ると、チンチンとよい音がしましたので、これは　木の葉じゃない、ほんとのお金だと思いましたので、棚から子供用の毛糸の手袋をとり出して来て　子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼を言ってまた、もと来た道を帰り始めました。

子狐　「お母さんは、人間は恐ろしいものだって仰有ったが　ちっとも恐ろしくないや。だって僕の手を見ても　どうもしなかったもの」

と思いました。けれど子狐は　いったい人間なんて　どんなものか見たいと思いました。

四場

◆帰り道。子狐が窓越しに、人間の母子のやりとりを聞く。
◆ナレーター、子狐、母狐、母親、坊や

ある窓の下を通りかかると、人間の声が　していました。何というやさしい、何という美しい、何と言うおっとりした声なんでしょう。

母親　「ねむれ　ねむれ
母の胸に、
ねむれ　ねむれ
母の手に――」

子狐は　その唄声は、きっと人間のお母さんの声にちがいないと思いました。だって、子狐が眠る時にも、やっぱり母さん狐は、あんなやさしい声で　ゆすぶってくれるからです。

するとこんどは、子供の声がしました。

坊や　「母ちゃん、こんな寒い夜は、森の子狐は　寒い寒いって
啼いてるでしょうね」

すると母さんの声が、

母親　「森の子狐も　お母さん狐のお唄をきいて、洞穴の中で
眠ろうとしているでしょうね。さあ坊やも早く
ねんねしなさい。森の子狐と坊やとどっちが早く
ねんねするか、きっと坊やの方が　早くねんねしますよ」

それをきくと子狐は　急にお母さんが恋しくなって、お母さん狐の待っている方へ　跳んで行きました。

お母さん狐は、心配しながら、坊やの狐の帰って来るのを、

今か今かとふるえながら待っていましたので、坊やが来ると、
暖い胸に抱きしめて泣きたいほどよろこびました。
二匹の狐は森の方へ帰って行きました。月が出たので、
狐の毛なみが銀色に光り、その足あとには、コバルトの影が
たまりました。

子狐　「母ちゃん、人間ってちっとも恐かないや」

母狐　「どうして？」

子狐　「坊、間違えてほんとうのお手々出しちゃったの。
でも帽子屋さん、掴まえやしなかったもの。ちゃんと
こんないい暖い手袋くれたもの」

と言って手袋のはまった両手をパンパンやって見せました。
お母さん狐は、

母狐　「まあ！」

とあきれましたが、

母狐　「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間は
いいものかしら」

とつぶやきました。

〈完〉

Podcast ののラジオ　好評配信中！

視聴・購読はこちらから
https://gekidannono.com

ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。
みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。
いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

劇団ののと読む名作文学　新美南吉　『手袋を買いに』Podcast 版

発行日　令和 3 年 5 月 16 日
著　者　新美南吉
編　集　劇団のの
発　行　劇団のの
https://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。
　ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。
底　本　『新美南吉童話集』岩波書店　1996（平成 8）年
初　出　1943（昭和 18）年
図書カード URL
https://www.aozora.gr.jp/cards/000121/card637.html